2025 年度　第 28 回　関西まちづくり賞　表彰式を開催

日本都市計画学会関西支部では、1998 年度から「関西まちづくり賞」を設け、まちづくり、都市計画の進歩・発展に著しい貢献をした優れた成果または実績を表彰しています。2025 年度は、1 つのプロジェクトをまちづくり賞に、２つのプロジェクトを奨励賞に、２つのプロジェクトを功労賞として表彰しました。

表彰式は、2026 年 4 月 11 日（土)、関西支部総会に引き続いて開催し、関西支部長による受賞者への表彰後、受賞者によるプレゼンテーションとパネルディスカッションを行いました。

受賞者の皆さんと支部長、関西まちづくり賞委員会委員長

パネルディスカッションでは受賞者間で活発な意見交換が行われました

<第 28 回　関西まちづくり賞　表彰プロジェクトの紹介>

◎関西まちづくり賞

『さこすて®みわ　地域とともに進める持続的な駅まちづくりの取組　―三輪駅と周辺地域での事例―』

受賞者：さこすて®／ジェイアール西日本コンサルタンツ株式会社、三輪まちづくり法人　株式会社リアライズ、三輪駅地域作戦会議

本事例は、奈良県桜井市の三輪地域において、鉄道系建設コンサルタント会社と地域のまちづくり会社、地域住民が連携・協働し、JR 三輪駅の駅舎内の一部や駅前広場を活用してエリア全体の活性化と地域活動に携わる人材の発掘、地域関係者による活動の深化によりまちづくりの発展を目指す取り組みである。

三輪地域では、三輪山をご祭神とする日本最古の神社「大神（おおみわ）神社」に年間 600 万人もの参拝客が訪れる。その他、日本で初めて開かれた市場「つば市」の守護神が祀られている「恵比須神社」や日本最古の道の一つといわれる「山の辺の道」といった歴史的価値のある名所旧跡が数多く存在し、また日本酒発祥の地、三輪素麺の産地としても有名な地域である。

1898 年（明治 31 年）開業の JR 三輪駅は古い木造平屋の駅舎であり、時代とともに使われなくなった臨時改札や臨時券売室などが存在しつつ駅は無人化されている。そこで JR 西日本のグループ会社が「チームさこすて®みわ」を結成し、2022 年から地域と連携した活動がスタートして、定期的な駅でのイベントや月 1 回の地域会議が継続開催され、地域活動の発展や新名物の開発、また地域における駅の拠点性の再構築につながっている。人口減少下にて、鉄道会社と地域が連携した「沿線まちづくり」が注目されるなか、本事例は、鉄道関係者が丁寧に地域の方々との信頼関係を構築し、遊休資産と地域リソースを活用しつつ駅を次世代の地域拠点へと発展させるものであり、無人化へと進む全国のローカル駅をまちの拠点として活性化させるための参考となる。

ご受賞おめでとうございます

活動の様子

◎関西まちづくり賞　奨励賞

『ミナミ御堂筋の官民連携・エリアマネジメント

～既成市街地の不動産オーナー連合がめざす“世界の御堂筋”～』

受賞者：一般社団法人ミナミ御堂筋の会

本事例は、大阪市の中心的繁華街であるミナミ御堂筋において、不動産オーナーを中心とした沿道有志による意見集約および表明の場として「ミナミ御堂筋の会」を発足し、地域ビジョンの作成および一体的な活動の展開を実現させた取り組みである。

ミナミ御堂筋は、ハイブランドの店舗やオフィスに加えて商業ビル・ホテル等も立地し、インバウンドの急進もあいまって賑わいが溢れるストリートで、周辺には個性ある店が並び、買い物や飲食を楽しむことのできる繁華街である。2014 年に大阪市が実施した御堂筋イルミネーションの南進化を契機とし、協力・協賛の依頼に賛同した沿道有志が集まり、2015 年に 13 社の正会員と 1 社の賛助会員の参加を得て、正式に「ミナミ御堂筋の会」が発足した。

その後、大阪市の事業である御堂筋の道路空間再編計画に呼応し、ミナミ御堂筋の会は空間整備とその後の維持管理・活用を考えるべく、町会・商店会・関係団体と協調した「沿道協議会」の設立に参画している。従前は不動産オーナーなどの意見を大阪市へと届ける仕組みが確立されていなかったことに対して、ミナミ御堂筋の会は地域住民の意見を集約・表明することのできる場として機能しており、この沿道協議会において官民連携を円滑に実現させることに大きく寄与している。その他にも、沿道空間の利活用方法を模索するための研究会の開催や定期的な社会実験、地域ビジョン（ミナミ御堂筋ビジョン 2022）の作成、放置自転車の撤去活動など、沿道空間の高質化に向けた様々な活動を実施している。

2021 年には事業拡大を図るとともに、組織としての確立をめざすべく、任意団体から一般社団法人へと移行しており、近年は毎年 3-4 回程度の視察依頼が届くなど、全国的にも注目度の高いエリアマネジメント団体であると評価することができる。沿道不動産オーナーの団体加入率は約 4 割程度であるものの、地域意見の集約がほとんど行われていなかった本エリアにおいて、ミナミ御堂筋の会が生まれたことで統率の取れたマネジメントや活動の萌芽を確認することができた。

ご受賞おめでとうございます

活動の様子

◎関西まちづくり賞　奨励賞

『みんながつながるウォータータウン　～帰帆島及び中間水路を地域の資源とした新たな水辺の暮らし～』

受賞者：老上西学区まちづくり協議会、立命館大学理工学部都市地域デザイン研究室（金度源研究室）、立命館大学理工学部都市空間デザイン研究室（阿部俊彦研究室）

本事例は、滋賀県草津市の市街化調整区域に位置する老上西学区において、「地域資源を活かした産業の支援」を施策の柱に、学区内にある地域資源「矢橋帰帆島及び中間水路」を活かしたまちづくりを地域、行政、大学と連携しながら進めている取り組みである。

草津市では、人口減少、少子高齢化、生活利便施設や公共交通の不足、産業における担い手不足等の深刻化が先行している市街化調整区域を対象とした草津市版地域再生計画(2018 年度から 2039 年度までの 20 年間の計画)を策定。老上西学区では当該計画の推進のため、大学と連携し、住民意見を反映しながら R4 年 8 月に構想「みんながつながるウォータータウン～帰帆島及び中間水路を地域の資源とした新たな水辺の暮らし～」を策定した。

構想実現に向けて、地域活性化を推進するため、中間水路を活用した水上アクティビティおよび環境・地域の体験学習を組み合わせた社会実験を R4 年から継続的に実施し、これまで協議会の活動に参加していなかった世代などを活動に取り込み、次世代の担い手づくりを進めている。また、地域周辺の琵琶湖の環境を守るための活動として、中間水路の湖岸の清掃活動をおこなうボランティア団体「びわ湖まもり隊」を設立。毎月第 1 週日曜日の定例開催を継続しており、地域住民が地域コミュニティ活動へ参加が促進されている。ハード整備に向けては、遊具更新を控えた矢橋帰帆島公園において、地域住民・大学・行政が協働し、公園を日常的に利用する親子を対象としたワークショップを開催。利用者視点を起点とした公共空間づくりにつなげるべく、地域に根ざした丁寧な対話の場を創出した。

本事例は、「ウォータータウン構想」の実現に向けて、地域住民・大学・行政が協働により多様な実践を積み重ねることで、地域の新たな担い手づくりを行いながら、持続可能な地域づくりを推進している点を評価するとともに、今後、矢橋帰帆島の主要施設(矢橋帰帆島公園、下水道施設等)を有する滋賀県との更なる連携強化によるハード整備を含めた構想実現が期待される。

ご受賞おめでとうございます

活動の様子

◎関西まちづくり賞　功労賞

『浜甲子園団地建替事業における都市デザイン、コミュニティデザインのプロセスとその成果』

受賞者：独立行政法人都市再生機構西日本支社、浜甲子園団地デザイン協議会、武庫川女子大学、浜甲子園団地団地再生協議会、一般社団法人まちのね浜甲子園

本事業は、1960 年代前半に建設された関西でも有数の大規模団地である「浜甲子園団地」（敷地面積 31 万㎡、150 棟、4,613 戸）において、ＵＲ都市機構が、「団地から街への再生」を基本理念に、多くの関係者と協働し、1995 年の着想から約 30 年もの長い期間をかけ、ハードとソフトの両面で丁寧な検討プロセスを経て、団地全体の再編を実現した取り組みである。

取り組みの初期段階では、学識経験者や行政との連携のもとで、新たな街の再生に向けたまちづくりの指針となるグランドプラン・グランドデザインを策定している。この指針に基づき、公園や歩行者空間などの公共空間の整備、街区ごとの土地利用や空間構成の基本方針を地区計画としてルール化。住棟の建て替えに際しては、マスターアーキテクトによる統括的なデザイン監修、学識経験者や行政を交えたデザイン協議会での景観デザインの調整、住民とのワープショップの実施など、様々な手法を工夫しながら丁寧なプロセスを経て建て替え事業を進めてきた。こうしたデザイン手法やプロセスが高く評価され、第Ｉ期の建て替え完了後の 2006 年度には、関西まちづくり賞を受賞している。　その後、新たな展開として、街区ごとに PPP 方式により民間の事業パートナーを公募。単なる土地譲渡のみに留まらず、協働して地域のまちづくりに継続的に取り組む事業主体を選定し、2016 年にエリアマネジメント組織「まちのね浜甲子園」を設立している。

エリアマネジメントの活動は、住民からの会費収入や、土地の譲渡収益の一部で原資を賄うことにより持続的な体制を確保し、団地の自治会や地元の武庫川女子大学など多様な主体とも連携しながら、情報発信やイベント開催など様々な取り組みを展開している。また、コミュニティスペースやカフェなど地域のハブとなる３つの拠点を整備し、地域住民の主体的な活動や憩いの場を提供するなど、エリアの価値向上に向けて精力的に取り組んでいる。また 2020 年には、住民の憩いや交流の空間として、エリア中央を東西に貫く全長約 640m の広々とした並木道「ブールバール」を全面完成させている。

このように、約 30 年もの期間をかけて、グランドプラン・グランドデザインのもと、多様な関係者を巻き込みながら様々なまちづくりの手法を取り入れ、地道で丁寧な取り組みを継続的に積み重ねながら、一定数の団地内住み替えも実現させ、大規模団地の再編を完遂された点が評価された。

ご受賞おめでとうございます

活動の様子

◎関西まちづくり賞　功労賞

『地域団体が結集した「北新地みらい会議」による北新地の自律的・継続的なまちづくり活動』

受賞者：北新地みらい会議

本事例は、大阪・梅田の南に位置する高級歓楽街において、これまで町会・商店会・協会などが個別に抱えていた課題を一つにまとめ、地域団体が連携して一体となって客引き撲滅や景観向上などの問題を解決し、品格ある魅力的なまちづくりを推進してきたと取り組みである。

2017年度より、大阪市建設局による新地本通りのリニューアル工事を契機に、北区役所の支援の下､地域の様々な主体が参加する“堂島地域まちづくり検討会”が設置され、堂島・北新地のまちづくりの議論が開始された。歴史を調べ､まちを歩き､議論を重ね､まちづくりビジョンを作成し、2018年度には、堂島･北新地プライドの会”を設置され、「温故新地」と名付けた魅力発信活動に展開した。2019～20年度には、新地本通りリニューアル工事への地元提案を取りまとめ、建設局へ提案し、それを考慮した工事が2020年度に完成している。コロナ禍による活動の制約がある中、リモートでの議論を継続し、地元専門学校と連携した動画撮影と配信などを実施。その後、温故新地のライブ配信、動画撮影配信の継続、不法駐輪実態調査などを実施し、活動開始から5年が経ち、「区役所の支援から卒業し、自立した組織に移行すべき」との声が上がり、2023年に、北新地の12の地域団体が結集した自律的な組織「北新地みらい会議」が設立された。自らの資金による活動により、基盤づくり（体制、規約、会議体）、情報発信（HP、X、インスタ）、パンフレット・企業勧誘リーフレット作成し､これらの自立的な活動により､放置自転車対策･客引き撲滅活動において一定の成果があがっている。

夜間の歓楽街という特殊性はあるが、商業地における賑わい振興や文化保全の取組として参考になる。また、100%の行政支援からスタートしたまちづくり活動が、資金及び人材の面で段階的な活動により自立化を図った８年間の長期にわたる努力のプロセスは評価に値する。一方、まちづくりの成果は、他の歓楽街においても実施されているような放置自転車対策・客引き撲滅活動にとどまっている。

今後は、本会の活動にかかるエリアマネジメントの会費を、既存の地域団体や内部の事業者にとどまらず、外部の取引先企業・従業員・顧客など、幅広い会員から少額単位で集めている点や、動画による積極的な外部への広報活動を活かし、多様な主体の連携による本格的なエリアマネジメントやまちづくりの事業に発展していくことが期待される。

ご受賞おめでとうございます

活動の様子

<第 29 回関西まちづくり賞の募集に向けて>

2026 年は 6 月 15 日に関西まちづくり賞の募集を開始した。関西支部として「関西まちづくり賞」を通じて、関西独自の特色あるまちづくり活動をさらに発掘・発信していきたい。

学会員の皆様には様々な地域で活動を続けているまちづくりの主体の方々に、積極的に賞に応募していただけるよう呼びかけていただきたい。多数の関西まちづくり賞の応募を期待している。